

山形短期大学民話研究センター資料叢書

しらたかの民話

蛇むこむかし

編
武 奥
田 村
幸
正 雄

しらたかの民話

蛇むこむかし

笠地蔵 (二)	5	あずめのからめ	42
笠地蔵 (二)	6	鮭のよむかし	44
桃太郎	7	南山のばかむこ	45
かちかち山	9	オタタカ鳥	45
猿むこ	13	むじな長者	47
瓜姫子と天邪鬼	16	狸の化物	49
ダンゴむかし — 米をぶさたにするな —	18	オンサローの化物	50
馬方と狐	22	ドンドンガラリンの化物	53
さるとビツキ	25	トーツポテンの化物	54
かわうそと狐 (二)	29	与三むかし	55
かわうそと狐 (二)	34	法印と狐 — 大瀬の化けもの寺 —	58
蛇むこむかし	35	糠福と米福	63
火種をもらった嫁	38	花咲じい	64
寝太郎むかし	40	赤い小箱 白い小箱	70

雀むかし
 お糸唐糸
 食わず女房
 姥捨
 まま子とひばり
 テデッポッポ
 寝太郎（一）
 寝太郎（二）
 蛇にみこまつだ娘
 夢と餅
 どんずやりにあ切りがない
 狐千匹
 大当たり
 神ない話
 こころあたりは屁くさい
 トクサのワラジ
 シビとゴザ

74 75 76 77 79 82 83 85 85 87 89 90 92 93 94 96 97

ブドとのみ
 えじご たちご
 のろろ話
 水の種
 トチの実ポタン
 烏帽子沼
 伝説
 鎌倉権五郎の投げ石／黒滝神社縁起
 民謡
 菖蒲しようがいな／最上川舟唄
 ○白鷹の民話―その文化圏について―
 ○あとがき
 武田 正

28 33 37 52 69 98
 99 100

凡 例

1. 表記の方法はなるべく話された通りとしたが、特に言いまわしについて白鷹地方の特色ある言葉及び方言には点をつけた。
2. 「むかし、あつたけど」「むかし、あつたけどな」「むかしあつたど」などで始まり、「トービント」「トービン三助猿まなぐ…」で終るのが一般であった。
3. 二・三のものについてはストーリーに混乱があり、明らかに誤りと思われる点については訂正をしたが、話者の語り口そのままを原則とした。
4. 昔話と伝説に分類できないようなものは資料として無意味であると云えないと考えて、一・二入れたものもある。
5. 民話を収録した文献に関しては拙編『米沢の民話』目録を参照されたい。

笠 地 蔵（一）

じさまがツメ（大晦日）に町さ行つて、ツメ買ひものして来たど。そしたら途中で地蔵さまが、雨にあたつて濡れただけど。

「こりや、むごさい地蔵さま。オレあ何も持たねんだし」

どて、自分の禪をとつてかぶせて来たど。そして家さ歸つて来て、

「ばば、ばば、今日は地蔵さま、あんまりむごさいようだったので、オレあ禪とつかぶせて来た」

て云うたら、

「なえだ、じさま禪もあるもんでない。いかにしてて、衣裳とか何とかだれただげんど、禪じゃあるもんでない。そのうちに罰あたつから」

とていたらば、夜に家の前さ、ドガンという音がする。「ほりや、そのうちに来た」て云うて出はつてみたれば、すばらしい宝物、葛さ入っていたつけど。

「さつき、うんと親切になつたお札に、少しばりだげんど置いて行んから、使つ

てける」

あけてみれば、さまざまな宝物いっぱい置いて行つたんだけど。トービント。

（貝生 工藤兵次）

笠 地 蔵（二）

雨降りに石の地藏さま濡つてだのを見て、米買う錢で、笠買つてかぶせて、家さ歸つて来たら、「米なんぼ買つて来た」て、ばさまに、じさまが聞かつたど。「地藏さま、雨に濡つでだけがら、笠買つて地藏さまさかぶせて来た」て云うたれば、その夜、「じんちや家^えあ、どこだ」て大八車さ米いっぱいつけ来て、置いていったど。

（中山 山川嘉之助）

桃 太 郎

むかし、おじいさんとおばあさんあつたど。おじいさんが山さ柴刈りに、おばあさんが川さ洗濯に。して川から流つて来た桃拾つて来て、そのうちに、山からじさまが帰つて来たもんだから、

「桃拾つて来たから、ごちそうすっからって」

持^たつて来て、俎の上さあげて、割つてくれんべと思つたら、桃の中から子供が出て来たど。

「ほりや、オラダ子なしだから、天から授がつたんだべ。立派に育てんなね」
なて、一生懸命育てたど。

十五才になつて、

「鬼ガ島さ征伐に行つてくるから、キビダンゴこしやえでけろ」

「そげな危ないどさ行かねだら、ええんねが」

て云うげんども、「行つてくる」て云うことで、キビダンゴこしやえでもらつて、

ずうっと行ったところが、始まり犬と会ったど。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござる」

「鬼ヶ島さ征伐に行くどこだ」「背負つてだな、なえだ」

「こいつあ日本一のキビダンゴだ」「ほんじゃオレどさ一つ呉れでおぐやえ」

そして一つもらつて行ったれば、猿が来たど。猿もその通り一粒もらつてお供して行ったらキジが来たど。キジも一粒もらつて行くこどになつたど。そして四人して鬼ヶ島さ行つたど。ところが鬼ヶ島さ行つたれば、鉄の門があつて入らね。キジあ、

「オレが飛んで行つて開けてけっから」

て飛んで行つて、内から戸を開けだど。門を開けて行つたら、鬼共あ大酒盛の最中だつたど。そこさ入つて桃太郎が攻めたら、鬼も降参して、

「宝物ありつたげ上^{あげ}つから、生命だけ助けてもらいたい」

て云うもんだから、車さいっぱい宝物もらつて、凱旋したど。トービント。

(中山 山川嘉之助)

かちかち山

むかし、おじいさんとおばあさんがいだっけど。おじいさんは毎日山さ開墾に行つてだっけど。ところが昼間近くなつど、どこからか狸が来て、根っこさ腰かけで、じさまが、

「一粒蒔いたら千なれ、二粒蒔いたら二千なれ」

て一生懸命掘つては穴あけ、掘つては穴あけ蒔ったら、狸あ、

「一粒まいたら腐くつされろ、二粒まいたら腐くつされろ」

て悪態語つこんだど。じさまは棒持たがつて、追かけっけんども、狸はなかなか早いもんだから、獲りぱぐつてしまふがつたど。ご・し・や・げ・る・ん・だ・し、何とかしてあの畜生獲つたいもんだと思うこんだど。

次の日もまた行つて豆蒔きしてつど、また狸がどつからか来て、いたずら語つことだど。じさまは家さ帰つて来て、

「ばば、ばば、毎日狸の畜生来て、オレどさいたずら語る、何とかして獲つてや

らんなねど思うげんど」「そんなの造作ない」

て云うて、おばあさんがこう教えたど。

「町さ行つてモツチ（鳥餅）でつ・つ・り買つてこい。毎日狸が尻かける根っこさ塗つておくといい」

おじいさんは、早速根っこさモツチ塗つておいつだど。次の日、まだ狸が来たど。

「また来たな、畜生。今日獲つてけるぞ」そして「一粒蒔いたら千なれ、二粒蒔いたら二千なれ」て云うたら、狸はどさつと腰かけて、「一粒まいたら腐つされろ、二粒まいたら腐つされろ」

て始めたど。鋤持たがつて行つて、ひ・つ・ば・だ・き・つ・け・だ・ど。狸は動がんねぐなつて、とうとう捕つたど。その狸を家さ持つて来て、晩ふげの狸汁にすんべと思つて、ぶら下げでおいだど。息子に、

「隣さ行つて、鍋借りて来い」

て騒いでいるうちに、狸は本性を出して、おばあさんに一生懸命になつてだま

したど。

「どうか生命だけ助けてけろ、何でもオバサの云うこと聞くから、縄ほどこいてけろ」

「じさま帰つて来たら、オレばりせめられつから、そげなごどされない」

したれども、とうとう頼まれて縄をほどこいてしまったど。そうすつど、

「じじのために、オレあこがえひどい目に会つた。ばばを殺さんなね」

て、おばあさんを噛み殺して逃げて行つてしまつたど。おじいさんが帰つたところ、おばあさんが死んで、狸あいないんだし、狸汁どこでない。茶毘出しさんなねぐなつたど。その茶毘のとき、兎が見舞いに来て、

「なにしつた。まず」て聞いたので、

「こういう訳で、ばばあ殺さつてしまつた」て答えると、

「ほんじゃ、敵かたきとつてくれらんなね」「なじよすつこど」

「あした山さ行つて狸どこ、ひつ捕えて敵かたきとつてける」

て云うもんだから、おじいさんは兎に頼んだど。次の日、兎が柴刈りに行くど、

狸も来たので、「一背負いとつたら、一緒に帰んべな」て話かけ、一背負いすつど、「オレはのろいから、後だ」て兎が云つて、狸を先に立てて後から兎が来たど。いいころ加減のとき、火打石を出してカチカチして、柴さ火つけだど。狸は、

「火のもえる音するんねが」て云うど、兎が、

「んなえ、何かの音だべ」てだましつつだ。

「いや、なんだか、火あ燃える音するず」て云うど、兎も初めて気付いたふりして、

「んだほに、火がついた。火あもえる」て云うたもんだから、狸はどんどんと走つたので、ぼうぼうと燃えては、ヤケ・パ・タして家さ、コンコンで逃げで行つたど。

そうすつど、そこさ兎が、

「ヤケパダの薬、ヤケパダの薬」て、南蛮粉の薬をふれで行つたど。

「ああ、ええ薬屋来た。一つ買ってつけてみんべ」て買ってつけてみたら、今度は熱くて痛くて泣き出したど。

「いま少しすつど、痛みは止つから」てだまさつで、我慢しつつだ。とっても我

慢さんねがったど。

「ほんでは、かなり重傷なんだ。海さ行って洗った方がええ」て云うので、

「そうしんべ」て云うて、兎と一緒に浜辺さ行って、狸さ泥で慥えた舟さのせ、自分は木の舟さのつて、

「いま少し沖さ行ってから、洗うとええ」て云うたところが、泥の舟あ溶けて海さ沈んでしまったど。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

猿　　む　　こ

むかし、三人の娘を持っていた親父がいだど。母親はすでに死んでしまっていたど。

向いの山に悪い猿がいて、
「三人の娘のうち、誰か一人くんねど、あんだのどこ殺してしまうぞ」て云うも

んだから、親父は心配して、な・じ・よ・し・た・ら・い・い・も・ん・だ・か、猿どき娘くれるなても、
いた・ま・し・い・も・ん・だ・し、くれねどオレあ殺されんべし、蒲団かぶつて寝ていたど。
そうすつど昼になったから、御飯あがれて、娘が来たど。

「オレあとつても心配ごどあつて、飯など食くつてらんね」

「なに、そがえ心配なや、オドツツアマ」て一番上の娘が云うので、

「かういう訳だ。あ・ん・だ・だ三人のうち誰か一人くれねじど、オレどこ殺すて云う
なだ。あ・ん・だ嫁いつてくれねが」て云うど、

「小馬鹿こんばがくさい、猿のオカタになどなんね」て云うたど。

二番目の娘が来てもその通りだったど。

三番目の娘が来たら、また云うだどころが、

「オレあ嫁いぐ」て云うたど。

そして吉日を選んで猿さ申込んで、御祝儀して、い・い・い・よ・出・は・つ・た・ど。

次の年、三月のお節句が来たから、

「あしたお節句なもんだから、餅ついて家のオドツツアマど・こ・さ、食せんねぞ」

で」

「ほんじゃ、餅搗いてもって行かんねごで」

「何さ入つて行く？」て猿あ聞くので、

「オレのオドツツアマあ、なにかいさ入つど、移り香して嫌だていうから、臼がらみ背負つて行つてくれつどええげどな」

「こげな重たい臼がらみ背負つて……」て思ったが、オカタの云うことなんだし、聞かね訳にも行かないんだし、臼がらみ背負つて家さ来たど。途中の川端さ、すばらしく美しい桃の花が咲つたけど。

「オレのオドツツアマは桃の花大好きだから、一枝折てけろ」

「そんげな、じょうさね。まず臼を下ろしてか」

「いや、下ろしてでは駄目だ。下ろすと土くさくなつて、オドツツアマ食ねから、背負つたまま枝を折てけろ」

「あんまり、ええ。んじゃこの花か」

「もう少し天井の花がええ」て、だんだん天井さ行ったら、枝がらみ落ちてはあ、

川さ流つで行ったど。そして娘が家さ来て、こういう訳で猿を川さ流して来たて、オドツツアマに話したごとだど。トービント。

(貝生 工藤兵次)

瓜姫子と天邪鬼

むかしあつたどな。

じん・さ・とばんさいたど。瓜あ大事にして育おがして、もいで来たれば、そいつが割れて瓜から子供でたど。そいつば「瓜姫子」て名付つけて、大事にして育おがしたど。

瓜姫子あ機はたおりするようになったれば、

「何か食くたいものないか」て云うたれば、

「トコロ食くだい」て云うたど。そんでトコロ掘りに、じんさとばんさ行つたど。

行くときに、じんさとばんさは瓜姫子さ、

「アマノシヤク来たときには、決して戸開けんなよ」て教えて行つたど。アマノ

シヤクは留守などこ見て来て、

「戸開けてけろ、戸開けてけろ」て云うたど。

「開けんなつて云わつだから…」て云うど、

「少し指入るほどでいいから」て少し開けてもらつたら、そうすつど、戸をガラツと開けてしまつたど。そして瓜姫子を殺してしまつて、自分は瓜姫子の衣裳を着て、瓜姫子をなげて来て、知らぬふりして機おりしつたど。そうすつど、何にも知らねでトコロ掘つて来て、食せんべと思つたれば、皮がらみ食うから、
「皮あ食んね」て教えつど、

「皮あ皮の薬、毛は毛の薬」て云うて、トロコの皮も剥か^むねで、すぐに食つたど。そうすつど何だか不思議だと思つて気付いたれば、娘は殺して自分が娘の衣裳着つたことわかつて、じんさとばんさは、うんと悲しんで泣いだど。

そこさ人が来て、

「なにしつた」て云うから、

「こういうわけだ」て云うたれば、

「ほんじゃ退治してける」て云つて、みんなで行つてアマノシヤクは殺してけど。そしてカヤんどこ、ずりずり引っぱつて歩いたので、カヤの中の蕊が赤くなつたのだど。

トービントロロ、さるのまなぐさ毛がはえた、けんけん毛ぬきで抜いたれば、まんまんまつかかな血ができて、めんめんめつこになりました。

(中山 山川嘉之助)

ダンゴむかし ― 米をぶさたにするな ―

むかし、おじいさんが庭掃除したところ、一穂の米の穂を見つけたど。これは勿体ないと、それを粉にして、いい米も混えてダンゴをこしらえたど。食^たべんべとしていたところが、そのダンゴが転んで、ころころころと何処までも転んで行つたど。そこで、

「ダンゴどの、ダンゴどの、どこまでござる」て追かけて行ったら、大きな穴が

あつて、その穴にひよろひよろて入って行ってしまった。それから、し・よ・う・な・い・ん・だ・し、かまわずその穴さ入って、ずっと追かけて行つたところが、大きな地蔵さまいたけずま。そしたれば、地蔵さまの手さ、ちゃんと上つて、地蔵さまがダンゴをぺろつと食つてしまつたど。

「おじいさん、おじいさん、ダンゴのお札にええもの見せてやつから、おれの手さ上れ」

「もつたいなくて、地蔵さまの手さなど上らんねえ」

「ええから上れ」て云わつで、手さ上つたど。こんどは、

「肩さ上れ」て云うたど。

「もつたいなくて上らんね」

「ええから上れ」かまわず上つたれば、

「頭さ上れ」

「もつたいなくて上らんね」

「ええから上れ」て云わつで頭さ上つたど。その後、

「梁の上にいろ」て云うので、梁の上さ上^{あが}ったど。

「いまに鬼共が一杯バクチうちに来^くつから、そん^どきいい頃にトキ（鶏）をつくれ」て云わつたど。

そのうち鬼共がぞろぞろと集まつて来たど。そして鬼が、

「人くさくないか、こりや」て云うど、地藏さまは、

「人など誰もいね」て云うたど。

鬼共は地藏さまの前で蓆をひろげてバクチぶち一生懸命になつてやつたど。そして大体夜明け近くになつたもんだから、おじいさんは鶏のまねをしたど。

「こりや、夜明けるな、だんだん行かんね^ごで。」

そしてしばらくして二番鶏のまねして鳴いたので、

「こりや、夜明けるな」すると、三番鶏のまねしたど。みなは慌てて銭などありつたけ、そこさ置いてはあ、行つてしまつたど。地藏さまは夜明けたもんだから、

「おじいさん、おじいさん、降りてこい、こいつあ^んだ^んどこさダンゴ御馳走になつたごほうびにあげ^つから、みな背負つて行け」て云わつたがら、おじいさん

は有難くてはあ、その金みなもらって家さ帰って来たと。

「おばあさん、おばあさん、昨夜、ゆんべな、こういうわけで大した金、地藏さまにもらつて来た」て云うたど。そしたらおばあさんが、

「そんじやら、俺も行つてもらつてくんべ」て云つて、ダンゴこしやえで、転びもしないなを転ばし、転ばし、穴さ入つて行つて、地藏さまに食せたど。

「んじや、晚げまでいて、鶏のまねしろ」て云わつたど。そして鬼共がぞろぞろ来たら、

「なんだか今夜は人くさい」

「いや決していない」て地藏さまが云うげんど、

「いないぎない。とにかく匂いすつから、さがせ」て云うて、鬼共がさがしたら見つかつて、引張り出さつて、さんざんな目にあわせらつて帰つて来たど。トー
ビント。

(貝生 工藤兵次)

馬方と狐

むかし、あつたけどな。

ここから行くとマキサワというところあんべあ。そのマキサワに川神さまという家あつどれあなあ。川神さまどこにな、むかし、丁度今頃、お正月になつとき、下山の方から馬率しちやまいて、お魚買いに来たんだど。そして馬方あ、お魚いっぱい付けて、酒飲んで、いい機嫌になつて馬方来たんだど。そして、馬方の丁度先、狐あちよこちよこちよことあえてくつけど。

「はあ、あの畜生つきしょう、どこさ行くなだべな」て見てつど、道の側さ落つてだ馬の口――馬の口ざあ、馬さ履かせるワラジよー、ちよえんと背中さ背負つたど。そしてれば、そいつあ赤子になつたど。そしてオギヤオギヤて泣くなだからね。

「あの畜生、何処さ行くなだべな」て、馬方見つだれば、ちよこちよこちよこて馬方の先になつてあえて行つて、川神さまの家えさ行つたんだど。

「はあ、川神さま、川神さまさ、なして行くなだべな、あの畜生」て馬方は馬静

かにあえ^ばせて来たんだど。そしたれば、その狐あ川神さまの家さ行つて、
「ば^ばちや、寒くなつたから、泊まりに來た」なて云つたんだど。家の中からば
ばちや、

「おやおや、よく來た。早く、まずあた^れ」なて家の中さ寄せだんだど。

「なん^ぼかお^ぼこ^おぼ^こ育^{おが}つたべはあ」て、ばばちや云うもんだから、

「こ^がえに育^{おが}つたず、ばばちや。見てけろまず」なて、お^おぼ^こ出して見せたんだ
ど。そうすつど馬方あ、

「こりや、川神のばさま、狐にだまされつどごだな、こりや。よーし、俺ああそ
こ、こんど見破つてけんね」なて、こんどは馬ば、道の傍さつないで、頬かぶ
りして、そつと流^しの方さ廻つて行つたんだど。そしたれば、

「あ^んだ^だ來^だた^だんだから、うまいものでもして、煮^かて食^かせんねべ」て、ばばちや
流^しさ行^つて米^こといだり、お菜^{さい}こ^しやえ^だり^りしたんだど。そしたら、その娘は—
狐だごで—、

「いや、オレあすつからええ、ばばちや、コタツさ當つてろ」て云うもんだから、

ばばぢやは子供抱いてコタツさ当ってたんだど。そうすつど、娘は流し・さ行つて米といだり、味噌すつたり、お膳部したんだど。そしてその水、ちやあゝて流し・さ、流してよこしたんだど。そしてれば、流しの陰に見つた馬方の足さ、ちよちよちようて、その水かかつたんだど。馬方あ、

「この畜生、オレとこだました他に、またオレどさ水掛けあがつた。だつ・で・え、だつ・で・え」

て云うたんだど。そしてれば、誰か背中の方で、

「おう、おう、何しつた」なて背中叩く人いたど。

「黙つてろ、黙つてろ」

「何だごど、貴様、ほげ・な・ごど、黙つてろなて、狐にだまさつだん・ね・が・ほれあ」

「黙つてろ、黙つてろ、狐は川神のばさまば、だますとこだから、黙つてろ」

「何語っているどこなんだか、貴様、狐にだまさつだんだ・ご・で」て云つたんだど。

そしてよく見たら、ちよちよちようて、水など流して寄こしたんだと思つたら、馬あ小便たつでだど。馬の小便、足さかつたんだけど。

そしてこつちや来て見たれば、馬の背中さつけたうまいお魚、ぺろっと狐に盗んで行かつたんだど。川神のばさまあ、狐にだまさつたごんだと思つたけあ、馬方が狐にだまさつただんだけど。トービント。

(菖蒲 安久津久造)

さるとビツキ

向いの山に、むかし一匹の大きなさるが住んでいたど。お天気もええもんだから、山から里さ遊びに下りて来たど。そうすつど、お正月近かつたもんだから、餅搗きしつたつたど。餅食^くだくて、餅食^くだくて、歩^{ある}つてみだげんど、どこの家^えさ行つてもペタンペタンという音すつけんども、食^くうべくない話だど。そして、ずうつと行つたところが井戸があつたど。

その井戸のところに、ビツキあ一匹、ちよこんとしていたつけど。

「ビツキどん、ビツキどん、餅食^くたくないか」

「食たいげんど、そっちでもこっちでもペタンペタン音すっけんども、誰も持つて来てあげもうず人がない」

「ほんじや、オレあ食せつから、オレの云うこと聞け」て云うたど。

「井戸小屋の上から井戸の中さ、じゃぼん入って、オガオガ泣け」

「そんげなごとして餅食わせんのが」

「大丈夫食せつから、やってみろ」て云わつて、ビッキあ、小屋の上さ上つて、ジャボン入って、オガオガて云うたところが、餅搗きした家の人あ、

「なんだなんだ、赤子、タンナゲさ入ったんねが」て、みな餅搗きやめて来たど。

なんにもない。おかしなことだ。確かに赤子あかこの声したのに、と三四人集まったげ

んど。なんにもない。「ええがったな」て云いながら、もどいたら、そのうちにさ

るは一軒の家の餅、たがげるだけたがって、裏の山さコンコン行ってしまったど。

そしてさるは、山の上さ行つて餅を食つていだったど。

ビッキもさきだの約束もあるんだし、オレだけ御馳走なんだべて、ペタペタ登つてみたら、さるは山の上でちぎつては喰い、ちぎつては喰いしつたど。

「さ・き・だ・の・約・束・も・あ・る・し、オレとこさ、ちいと分けてける」て云うたどころが、
「は・え・つ・じ・え・げ・な、赤子のまねしたくらいで、餅など食かれるもんであ・ん・め・ち・え。
オレなど重たい餅を命がけて持たって来て、やつと食いはじまったばかりだ」
「いや、ほ・だ・た・て・さ・つきだ食せるっていうたもの、な・え・つ・た・て・食・せ・て・け・る」て、
ビッキが云うたら、さ・る・は、

「ほんじゃ、いま一ぺん賭をやつて、勝ったものが食うごど」

「なじよすつごど」

「この餅、ごろごろごろと下までか・つ・こ・ろ・ば・し・て・や・つ・て、一番早く届いた人あ食
うこと」

「オレあ走らんねから駄目だ」てビッキが云うたげんど、さ・る・は一人でかまわず
ごろごろと餅をかつころばしてやつたど。そしてさ・る・は餅さ追かけて、下さ行く。
ビッキあどだらどだらて降りて行つてみたら、餅は笹の葉っぱや木に、いっぱい
引掛つていたつけど。

「こりや、お助けだ」てビッキは、はがしては食いはがしては食いして行つたど

ころが、下からさるが登って来た。さるは餅さ届いてみたげんど、届いた餅はちいとばかりになって、石ばかりで、食うどこでなかったど。
だから人ばだましたり、悪いごときんねもんだ。トービント。

(貝生 工藤兵次)

ブドとのみ

酒呑童子の頼光が鬼を切ったとき、その血がパツと飛び散って「ブド」と「のみ」になったんだど。だから「ブド」と「のみ」は、今でも人の血を吸うんだど。

(貝生 工藤勝助)

かわうそと狐（一）

むかしな。その赤禿山の松の木の下に、古い狐が住んでいだっけど。丁度い
まみたいに、雪はちらちらと降って寒いとき、狐は、

「何か食いたいな、何か食いたいな」て考えっだど。んだげんども格別うまいも
のではないし、「河原の方さ行つて何か雑魚ざつこでも落ちていないか、行つてみつか
な」て、ずうつと河原の方さ行つたど。そしたら橋のどこまで行つたれば、大變う
まい匂いするんだど。お魚あぶる匂いするんだど。

「はてな、誰あここがいいにうまいお魚あぶつたんだべな」て思つて、「もしもし、も
しもし」て云つたど。そしたら、かわうそは、

「誰だ、今ごろ来るのざあ」て云うもんだから、

「赤禿山の狐だ。あんまり寒いから遊びに来たどこよ」て狐は云うたんだど。そ
うすつど、

「ほだが、ほんじや、お魚いっぱい釣つて雑魚あぶりしつたから、一服喫のめまず」

て、かわうそが云ったもんだから、狐は大喜びでかわうその家さ入ったんだぞ。そして、

「いやいや、大変雑魚とれたもんだね」て、狐は賞めたもんだから、かわうそは、
「いや、おらだ雑魚とり商売なもんだ。なんぼでも雑魚などとられつずだい。こ
こらのあぶつたのを食うとええぞで」て云うもんだから、狐は一串食ったれば、
いやうまくてうまくて、こたえられなくなつて、それから二串食ひ、三串食ひし
て、

「うまいがつた。ごちそう、ごちそう」なて、山さ歸つて行つたんだぞ。そして
次の晩になつたれば、また何か食くたくなつて、

「はてはて、昨日きのうかわうそに雑魚のでんがくごちそうになつたが、あいつまた食
だいもんだな」て、かわうその家さ行つたれば、また雑魚あぶつたけずま。そし
てまた昨晩ゆんべなみだいに、二つも三つもごちそうになつて、

「かわうそ、かわうそ、この雑魚さ、なじよして獲るもんだい」て聞いてみたれ
ば、

「やあ、こげえな雑魚など獲るの雑作ないもんだ」

「なじよして獲るなや、教えろ」

「ほ・だ・な・。秘・伝・つ・あ、他人さお教えらんねもんだげんど、狐は友達なんだから、教えっこであ。あのな、これから寒い夜よ、川の水は氷張^{すが}んべあ、氷張^{すが}ったとき、氷の上^{すが}さ行^{すが}つて、ちよちようて、小便たれ^{すが}つことよ。小便たれ^{すが}つど穴^{すが}くあくべあ、そうすつど、その穴コの中さ尻尾あ、ちよろえんと入^いつてやつど、その尻尾さ雑魚はいっぱい食^いつ^いつ^いく^いこで。そいつを今度は、ぎつと引^いつとらえ上^いつど、雑魚はぞろぞろぞろぞろと掛^いつて来るんだ。雑作ないもんだ。雑魚とるなざあ……」て教えら^いつだど。

そうすつど、狐はこげえな雑作ないことあ、オレもしてけまし^いようと、次の晩^いげ寒くなるばかり待^いつてで、松川さ行^いつて、柳の木の下さ行^いつて、すぐだま^いつていたど。段々と寒くな^いつてきて、川の上に氷が張^{すが}つたんだど。そこさこんど、い^いあ^いん^いば^いい^いだ^いて、川さ、狐あ、じよじよじよじようて小便た^いつだれば、穴^いくあいたんだど。その穴^いくさ尻尾をちよろえんと入^いつてやつたんだど。氷の上^{すが}さちよこ

えんと尻^{けつ}かけて待つていたんだど。段々だんだん寒くなつて来て、ふるふる^{ふる}。
げだりしたげんども、もうちよつと我慢してましよう、もうちよつと我慢してま
しようて、狐はその穴コき尻尾入れで待つてだんだど。そこでこんどは雑魚かかっ
た頃だと思つて、尻尾あげてみたら、なかなか抜けねもんだ。

「うんこりや、よつぽど大きな雑魚かかったんだべ」

そのうち段々夜明けて来るんだど。人に見つけられつど困ること起ると思つて、
一生懸命尻尾あげんべと思つたが、なじよしてもあがんねもんだど。そして雑魚
いっばい食つついであんだどええげんど、感^{かん}じるもんだから尻尾は氷^{すが}さみな
ひつついであんだど。狐はヤシヤナク^ななつて、

「少々の小雑魚、逃げだたて、大事あない、尾骨^{おぼね}が抜けるような、コンコンコン
コン」て泣いだんだど。そうしているうちに、狩人が来たんだど。夜明けだもん
だから、鉄砲^{たが}持つて、

「なえだ、あそこの氷の上さつくば^{つく}ば^ばていたのいた。なんだべあ」てよく見たら、
狐だつて。

「ええものみつけた」て、スパーンて鉄砲ぶって、狐は殺さつたど。

んだから人のもの、ただ食う気になつど、罰あたるもんだ。トービント。

(菖蒲 安久津久造)

えじご たちご — 雪ふみ唄 —

えじこたちご たちまちご 宮の松さ行つたれば あづき南瓜 食せらつ
じゃ

たま食たいとて行つたれば アカメはだ・だけ・て 見せらつじゃ

(萩野 川部嘉蔵)

かわうそと狐（二）

かわうそど出会って、

「オレに何かごちそうすねが」て狐あ云うたど。

「あまえ、ええ、その代り明日の晩げごちそうこしやえでおぐから」て、かわうそは寒い朝に川さ入って尻尾入っで、鮎だの鮎だのとして来て、狐ば待つてだど。そこさ狐あ来て、

「大したごちそうだ。ほんでは明日オレあごちそうすつから」て云うて、

「なじよして、こいつとつた」て聞いたれば、かわうそは、

「寒い夜、尻尾ば川さ入っておくど、さまざまな雑魚あ来て、尻尾さ喰つくくら、そんとき尻尾上げつど、雑魚あいっぱいとれる」て云うたど。

狐は早速、一晚川さ尻尾たれつたら、尻尾あ凍みで、引張り上げんべと思つても引張り上がんねくなつて、

「少々の小雑魚は逃げて、ええ」て一生懸命ひっぱったら、尻尾はボギッて

も・げ・て・し・ま・つ・た・ど。ト・ー・ビ・ン・ト。

(中山 山川嘉之助)

蛇むこむかし

むかし、村き三人の娘もった親父あつたど。

田に水掛んねくて困つていたら、蛇がやつて来て、

「ほんじやら、オレあ水掛けてけ・つ・か・ら、その代り娘の一人を嫁に呉^けろ、ええが」
親父あ困つて家さ帰つて寝つたど。昼になつて、一番目の娘が、

「なして飯食^まねのや」

「こういう訳で、飯食うどこでない。お前嫁に行つてけっか」て云うたら、一番目の娘は、

「蛇のオカ・タ・な・ど、とんでもない」て答えたど。それから二番目の娘が来たので、
また頼んでみたら、やっぱり一番目の娘と同じだったど。

三番目の娘が来たので、親父は、

「お前に聞いてもらわんねごんだら、オレあお飯食ね」^{ままか}て云って寝っただど。そして何日も食ねで寝っただど。三番目の娘は孝行娘だったほでに、

「ほんじゃ、条件ある」て云うて、長持一つさ、ゴマヤキメシ^{せん}千にぎって、そいつさ針三本ずつ入ってける、もう一つの長持さ、フクベン千^{せん}入っでける、て云うたど。

そいつを持って、打越の沼まで持って、オレどこ送って行ってける、て云うたど。そして蛇さ行き会ったもんだから、蛇はうれしくなつて挨拶したど。娘は、「そんでは、お前も腹減ったべがら、ヤキメシを皆食つて、…」て云うど。

「オレも娘としては、村一番で云わっただんだから、お前だって技量はあんべと思うし、フクベン、オレが沼さ千浮かすから、ありだけ沈めて見せろ」て蛇さ云つたど。

そしたれば、針三千本入ったヤキメシを食った体で、フクベンを沈めっど思つたので、フクベンはポコポコ^う浮きで、そっちすっこっち浮き、こっちすっこそつ

ち浮き、とうとう疲れ切って死んでしまったど。

そうして、裏千刈^{うしろ}、前千刈^{うしろ}の田あみな三番目の娘がもらったど。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

のろのろ話 — 長い話 —

石垣の間から、蛇は面^{つら}つきだしたど。そしてその蛇はのろのろ這い出したもんだから…。

「そして？」「まだのろのろだごで…」

火種もらつた嫁

むかし、あるどこさ、嫁さんが来たつけど。

「正月の年とりの晩は、オラエの家では火あ消さね家だ」て、姑から云つたど。
嫁は根っこくべで燃やしたど。んだげんど、寝ずの番だったが、昼間働いてな
もんだから、嫁はねぶけさして、とろとろつと眠ると、火もとろとろつて燃えて、
火種もなくなつてしまつたど。

ほんで、仕方くつて、考えあまり、外さ小便たれに出つど、向うの方から提灯
つけて来た人いだど。その人の来んのを待つていて、火種をもらおうとしてつど、
その人は真白の衣裳着て棺を背負つていだつたど。さびしいもさびしいげんども、
責任はあるし、和尚さまみたいでもあつたから、聞いてみたど。

「火くれんななど、かまね。火くれんなの代り、この棺ももらつてもらわんなね」
て云わつたど。仕様ないもんだから、棺ももらつて背負つて、提灯借つて来たつ
だど。ほんで家さそつと入つて、棺を自分の長持さ片付けて棺をすぽつと隠しつ

たけど。

そして提灯から火を移して炉たき火燃いで、知ししやねふりしていたど。

お正月札に、四日の日に行つてこいて云わっただげんど、嫁は、

「お正月札に行かね」て云うたど。

「来たばかりなのに、お正月札に行かねなて」

「オレの代りに、お前まへばり行つて来てける」て聲こゑさ云うたど。聲こゑも奇き体たいできたいで仕様しやうなくて、なんだのかんだのせめてみつど、

「実は、その開き棺はオレの長持ながぢさ入った」て云うたど。そう云わつてみたので、長持を出して来て見たどころが、中から出て来たのは、金銀綾錦の着物ひとそろい、そくつと入っていったたど。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

寝太郎むかし

むかし、村に寝太郎いだったど。寝太郎は寝てばりいたげんど、頭はええがつたど。

家さ猫一匹飼ってだけど。正月になつても、どんずやりだから、餅も搗かねがつたど。寝太郎は考えて猫の毛さ赤い紅^{べに}つけで、隣の金持の家の猫くぐりさ、ちよろいっと入ってきたど。そしたれば、猫は腹減つてるもんだから、ノシ餅しつたのに、ありつたけなめだど。そしたら餅はみな真赤になつてしまつたど。

そして次の日起されてみたら、餅が真赤になつてしまつたもんだから、金持の家では畑さ餅をみなぶんなげてしまつたど。そしたらその畑あ寝太郎家の田地^えだったど。そして寝太郎は起きてきてみたところは、餅、赤いくなつたな、いっぱいあつたもんだから、

「ああ、オレの計略はうまく行つたな、猫さ紅つけてやつたもんだから、猫あありつたけ腹減^へらかして、なめたに違いない」て云うて、それを寝太郎は畑からもつ

て来て食ったど。

それを食つてあと、また考えて、正月の十五日に、地蔵さまの杉の木の上さ、提灯さ〔天照皇大神宮〕て書いて、灯^{あかし}をつけておいだど。そして寝太郎は木のテッペンさ登つて、隣の金持の佐左衛門家^えに向つて、

「佐左衛門、佐左衛門」て云うたど。

したれば、佐左衛門はびっくりして、起きてみたら、地蔵さまの杉の木のテッペンさ〔天照皇大神宮〕て書いた提灯があつたので、手を合せて拝んだところが、「この土地には寝太郎という者がおるそうだ。今は食うにも食なくて困っているもんだから、酒と魚、餅、たきものを明日の朝^{あさ}げ、いっぱい持つて行かないど、お前の家は焼けてしまうぞ」て云うたど。

そうしつど、佐左衛門は本氣して、次の朝^{あさ}げに、奉公人にみんな持たせて、焼けるにはま^あしたも^もんだて、寝太郎どさ^さく^くれて来たつけど。トービント。

（貝生 工藤六兵衛）

あずめのからめ

むかし、村に男の兄弟がいたつけど。おぼんちゃんは珍らしい（あずめのからめ）ていう果物がうんと好きで、兄弟さ、その（あずめのからめ）採ってくれるように頼んだど。んだげんども、（あずめのからめ）のあるところには、鬼がいつかつたど。だからなかなか恐^{おっ}かなくて行かんね。

兄がおぼんちゃんに何とか食せつだくて、採りに行つたど。大きな（あずめのからめ）の木さ登つて、そこで一生懸命もぎ方^{かた}しつたところで、あっちからも、こっちからも鬼が出て来て「人くさい、人くさい」て云いながら、木の上の兄が見つかつて、引ずり下ろさつて、裂^さかつて食^くわつてしまつたど。

いつまでも兄が帰つて来なかつたので、おぼんちゃんが心配して、

「鬼にでもやらつたのではないか」て、ほだれば、舎弟がマサカリた^たが^つて、（あずめのからめ）もぎながら、兄の安否を尋ねて行つたど。

行つたれば兄の骨があちこちに散らばつていたど。舎弟は（あずめのからめ）

の木さ登っていっぱい実^なっていたのをほろつていたところが、あちこちから鬼が出て来て、

「風吹かねのに、あずめのからめがいっぱい落ちっだ。まだ人いたでないか」て上を見たら、人がいた。それを見た赤鬼が登って来たところ、マサカリで「えっ」て切りつけっど、ドダッて落ちた。

次に青鬼が登って来たので、青鬼の頸をマサカリで「えっ」て切りつけっど、ドサッて落ちてしまった。

次には黄色い鬼が登って来たが、それいつもマサカリで頭をや^らつ^てで、鬼は皆殺さっでしまったど。

舍弟はいっぱい（あずめのからめ）を背負って帰ったが、おばんちゃんは大変喜んだげんども、兄が殺さっだもんだから、さめざめと泣いだど。トービント。

（貝生 工藤勝助）

鮭のよむかし

むかしあつたど。

助けらつた鮭のよが、助けた男んどこさ、女に化けてやつて来たど。

「どうかオレを嫁にしておくやい」ていうもんだから、男は大変喜んで、カカアにしたど。そしたらカカアは毎日、流しでうまい御馳走こしやえで男さ食せつたど。

「この御馳走は、なじよしてこしやえんだ」て男がカカアに聞いたげんど、カカアは教えねがつたど。男は変に思つて、そおつとカカアの御馳走こしやえてつどこ見たら、カカアは自分のタラゴをとつて御馳走こしやえつたど。

その腹のタラゴを全部食わせてしまったとき、カカアはふらふらになつて倒つてしまつたど。

(貝生 工藤勝助)

南山のばかむこ

むかし、村にばかむこいだったど。オカタの家さ招かつて行ったら、ボタ餅搗きしったど。子供らがさ・さ・るもんだから、オカタの家の人が子供らに、

「オツカイゾ、オツカイゾ」て、傍さ寄せねがったど。そいつを見てた聾は、歸りにボタ餅をお土産にあずけられだど。そしたら聾はおつかないもんだから、棒の先さゆ・つけで、かつ・ねて来たど。そして「オツカイもの持つて来た」て云うたど。

(貝生 工藤勝助)

オタタカ鳥

むかし、あるどこさ、二人の兄弟あつたど。その兄の方が意地わるくて、舎弟の方は氣持のええ人だったど。同じもの食せらつても、兄の方は、舎弟の方さだ

け母がうまいもの食せてるのんねがて、云うごと^な為すごと舎弟の方ばかりめん
ごがって、オレを虐待するて考えていたど。

あるとき、兄が舎弟からニドイモ食せらつで、

「オレさ、こがえうまいもの食せんだから、舎弟の方はなんぼうまいもの食つ
てるんだか」

て、舎弟の腹切つてみたど。そしたら舎弟の腹からはニドイモの皮ばかり出
て来たど。

はじめて、兄は悪かったと思って、一日に八千八声、

「弟恋し、弟恋し、オタタカ鳥」て鳴かんねぐなつたのが、オタタカ鳥だったど。

(貝生 工藤六兵衛)

むじな長者

むかし、萩野さ、長者原ていうところあつたど。その長者原には長者がいっただ。なして長者になつたがて云うど、その長者は元は炭焼だつたど。

畑谷の大沼の傍さ行つて、その炭焼あ炭焼しつたど。あるどき、ある人から、
「あんだ、赤湯の沼さ行つて、親戚あつから、こいつ渡してけろ」て書面たのまつたど。

「あまえ、ええ」て、そいつ承知して書面もつて来たが、家さ歸つて書面あけて見たれば、

「この男、炭焼で、オレの沼さ来て、じゃあじゃあ、炭屑なげる、だつてくて困つから、こいつを何とか始末してけろ」ていう文面だつたど。そいづを見たもんだから、ごしやっぱらげで、書面を書き換えだど。

「この男あ炭焼で、火をじゃあじゃあ沼になげて困つから、いい暮しがされるようにしてけろ」

そいづを持って、赤湯の白竜湖どさ行ったら、人がいて、その書面を見て、

「ほたか」て、金の引臼をけてよこしたど。

その引臼を引くど、一合が二合に、二合が四合にふえて食って困んねぐなつたど。
長者になつた男は長者原さ家を構えて、嫁をもらつたど。ところがその嫁は人
出入が嫌いで段々すたつて来たげんど、一人娘がめんごくして仕方なかつたど。

村さ、あるとき、どっから若い男が来て、娘はその男さ惚れて、その男さ金
の引臼けてやてしまつたど。そいづを聞いた村の衆が、その男はむじなだて分つ
て、むじな御所さ、その金の引臼掘りに行くど、萩野の村が火事だて云うので、
もどつてみつど、どこも燃えていなかつたど。そこでまた掘りに行くど、まだ火
事だつて云うので、帰つてみつど、やっぱり火事でなかつたど。こいつはむじな
から騙さつたて、

「今度こそ、騙さんね」て、金の臼を掘りに行ったら、また火事だて云うげんど
も、誰も帰んねがつたど。そしたら本当の火事で、萩野村中焼けてしまつたど。

(中山 山川嘉之助)

狸の化物

むかし、お稲荷さまあたりに、夜になつど年寄りばさまあ、糸車廻していつかつたど。そしてローソク一本ちゃんと点^つけていつかつたど。

そういう化物出るもんだから、組寄合して、狩人^{かりうど}一人、組の中さいつかつたので聞いてみつど、

「ああい^{あか}う化物^{まなぐ}つうのは、灯しとか、化物の眼が化物の正体なもんだから、さいつをねらつて鉄砲ぶつてやれば、一発でとめ^られる」て狩人が云うたど。

嘘だか本当だか知らねげんども、その狩人が頼まつて、一つ玉、うーんと大きくこしやえてもらて出掛けて行つたど。

お稲荷さまどこまで行ぐど、年寄ばさまあまた糸車、ぐうぐうぐうて、ローソクつけて廻^{まわ}つたど。狩人はそのローソクをねらつて、鉄砲をぶつてやったところ^{ところ}が、一発でローソクはパツと消えてしまつたど。

次の朝^{あさ}、明^あるくなるのばっかり待つてで行つてみたれば、狸一匹^{ひき}だつたど。そ

の狸獲つて来て、みんなで狸汁して食つたど。ああいう化物いいもんだ。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

オンサローの化物

むかしあつたどな。

あるところに化物いだったど。夜になると、かまわず「オンサロー・オンサロー」て泣かつたど。ここだど、お稲荷さまみたいなどごでよ。そこで毎晩泣くんだったど。子どもは皆おつかながって、縮ちぢごまって、家の人も、ぺろつと戸たを閉てて、寝つだもんだど。んだげんども一番小つちやこい子どもが、

「化物なて、いねえでないか」て、荒氣あらげ吹いて、

「オレあ化物退治に行つてくる」て云うので、

「お前ニシヤ、化物退治なて行くど、化物に食われんだから、ほげなごどしないほうえ

えんだ」て家の人あうんと云うたげんども、聞かねで、

「オレあ必ず化物退治に行つてくる」て云うて、行つたどはあ。そして夜になつたればまた、「オンサロー・オンサロー」て泣くもんだから、こんどこそ、て、行つたど。お稲荷さまさ行つたれば、大きな穴があつたど。その穴から「オンサロー・オンサロー」て声が聞えだど。

「そんがえ、オブサつだいごんだら、オレの背中さオブサレ」て云うたど。そして冷たいなりで、ピタツとおぶさつたずも。んだげんどもあらいもんだから、こんどは化物みたいなのを、背負つてさつさと来たずも、そうして家の人は化物に食わつだと思つて心配していたどさ、「化物おぶつて来たから、見ろ」て、座敷の真中さ、ドガンて落したずも。そしたれば、ザラザラザラ、まるで家のうち中、金の音みたいな音立てたずま。家の人は、

「それあ化物出た！」て云うげんど、灯りつけて行つてみたずま。そしたれば、化物は瓶かめさ入った金かねと銭ぜにで、そいつが世の中さ出だくて、いつ頃だか穴の中さ埋めらつていたなが、「オンサロー・オンサロー」て誰かおぶつてくれないか、て、

毎晩夜になつど泣くなだつたど。その家は旦那衆になつたど。

んだから世の中には化物などいなくて、さびしいなてないもんだ。トービント。

(貝生 工藤勝助)

水の種

白鷹山の東さ沼が四十八あつど。あるとき百姓が水無くて開墾さんねくて困つて、神様さ願かけて、「水の種」もらつたど。安心して昼眠した百姓あ、水の種の入ったフクベンがむぐして、一ぼつたりの水の種あ四十八の沼つくつたど。

(貝生 中山)

ドンドンガラリンの化物

むかし、夜さなっど、お蔵王さまに、

“ドンドンガラリンのドンガラリン

ピンピンガラリンのピンガラリン

トーヒャラット エイ

ヒョーロット ドンドン”

て毎晩鳴く化物いだったもんだから、おかなくておかなくて、組合して退治に行つたど。

そこにお上人さま「お行さま」がおつたので、神おろしもらつて伺いを立てたら、

「あいつは煮^にたつ湯いっぱい持つて行つて、化物さぶつかけてしまふじど、一番易く退治される」て教えらつじやど。んで湯殿山神社のお行さまなもんだから、みんな本氣して、お湯を五升、コシキに沸して行つたど。やつぱり、

“ドンドンガラリンのドンガラリン

ピンピンガラリンのピンガラリン

トーヒヤラツト エイ

ヒョーロツト ドンドン”

てはじまった。その鳴声めがけて、お湯をありったけぶっかけた。そうしたところ^ろが、なして、こげ^えな大きな茸^{こけ}だった。んだ^んけんど、お湯掛けら^っつで、縮^{ちぢ}んで小^ちつちやぐな^なった茸一本^{いっぽん}だった。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

トーツポテンの化物

そこのお蔵王さまという神様あつて、夜さなると、「トーツポテン・トーツポテン」て、トーツポテンの化物が毎晩で、こ^こらの子供^{こども}らなど、お^おつかなくて、お^おつかなくて、夜小便^{よせうべん}たれにも行^いかんねが^がったど。

そうして、組合して、そのえらい人は、

「退治しなくてなんねえ、がきべら夜小便しにも行かんねくては、困るから」な
て、人を集めて大勢でお蔵王さまに行ったずま。そして行ってみたところが、
「トーツポテン・トーツポテン」て云つてるところさ行ってみたら、蚊の眼まなこさトッ
ポ（枳の実）入ったもんだから、「トーツポ、取って、トーツポ、取って」て泣いっ
ただけど。

世の中さ、化物などないもんだ。トービント。

（貝生 工藤六兵衛）

与三むかし

山形のようなどこさ、与三は魚買いに毎日行いんかったど。そして峠（狐越）あ
たりさ来くつじど、化物あいて、魚へろつと食われわれれかったど。

そんときも化物が出てきて、

「与三、与三、カラウオ一本けろ」て云うので、おっかなくなつた与三は、カラウオ一本くれてやつたど。そしたらそいつをむしやむしや食つて、また、

「与三、カラウオ一本けろ」

また呉れたど。そしてとうとうみな化物から、カラウオ食つてしまつたど。そして与三は恐つかなくて、家さ歸つて来て、梁の上さ登つて隠つていだつたけど。そうすつど、化物は家さ入つて来て、

「ああ、今日はええ日だつた。そんでは甘酒でも飲むか」て、甘酒温めていたど。与三は紙をくるくるて巻いて、化物の知らぬ間に、みな啜すてしまつたど。そうすつど化物は、

「甘酒もなくなつたから、餅でも焼いて食うべ」て、餅あぶつたど。

そのうちに背中あぶりして、眠つてしまつたど。そのすきに、与三は餅を食つてしまつたど。

化物は起きてみて、餅がないので、

「こりや、火の神様食つたんだか、ワタシの神様食つたんだか、なくなつたな」

そしていっど、

「今日は腹もいっぱいになったし、木の唐戸からどさ入って寝たらいいんだか、石の唐戸さ入って寝たらいいんだか、今日は寒いから、木の唐戸さ入って寝んべ」て、木の唐戸さ入って寝たど。

与三は、そつと木の唐戸さ近づいて、キリで穴コあけたど。

「こりや、キリキリキリキリて音立てる。キリギリ虫だか、なえだか、今夜は長者さまのキリギリ虫あ鳴つこど」て寝つたど。与三はがらがらお湯煮たてて、その穴コからお湯入いつて、化物退治したど。トービント。

(中山 山川嘉之助)

法印と狐——大瀬の化けもの寺——

「じぢぢや、いま一つ、むかし語んぞ」

むかしな、大瀬おおせに化け寺ざああったごで。化けもの出るお寺さまで、誰も住んでねがったなよ。そのお寺さまは法蔵坊ていうお寺だったのよ。

そのお寺さまに何処から来た貧しいお寺さまがいだったご。そのお寺さまあお布施ばりで暮さんねもんだから、毎日あらとはあ荒砥の町さ来て、托鉢でお経よんで、みんなから銭もらったり米もらったりして暮しったんだご。ある日、

「今日も天気ええから、荒砥の町さ行つて托鉢して、米でも買つてくつか」なて、その法蔵坊は出かけて来たんだご。そして下山しもやまの方からずうっと、お経読んで来たれば、あそこ、松立まつたてのところまで来たれば、川端のところにあ、狐あ昼眠したご。

「はあ、この畜生、うん、この昼日中ひるひなか、昼眠してきづかる。どおれ一つ、だましてけっかな」なて、法蔵坊は、そーっと忍び足して狐あ昼眠したどこさ行つて、

ホラ貝持^たつて、

〈ボ・ホーン・ボ・ホン・ボ・ホン・ボ・ホン〉

て、ホラの貝吹いだんだど。そうすつど、狐は魂消てたまげで、ピョーンではね上つて、はね上つた拍子に、下の松川さ、スポーンて吹飛んでいったんだど。

そうすつど、法蔵坊は、

「いやいや、面白^{おも}い、面白^{おもしろ}い、気味^きいかった、気味^びいかった」て手叩いて喜んだんだど。

そして町さ来て、そっちの家さ行つてお経あげで、

「今日はまず、松立で狐をたまげらかして、いやあ氣持よかった」て、大変手柄話して、ポ・ポ・ポて来たんだど。そして段々晩方えなんだから、夜上^{よあ}りすんべはあなて来たれば、

「何だか今日はいつもよりはあ、早く暗くなるようだ。西山あまだお天道さま入^{はい}る頃でないげんども、暗くなるようだ。おかしい日だ」て思つて来たんだど。そしてまた松立のあたりまで来たれば、なんだか下の方から提灯などつけて、みんな

なゾロゾロゾロて来るなだ見える。よつく見ると茶毘だど。

ドンドン カエンコン、ドンドン カエンコン、ドンドン カエンコン、
鉦と太鼓叩いて茶毘あ来たんだど。

「はあて、今頃茶毘あ来つずあおかしいごんだな」なて、

「まず、ここで、茶毘あ行くまで一服つけて見てつか」

土堤の側さ尻つ掛けて、たばこしたんだど。そしたれば、その茶毘あだんだん
と来て、

「ここさ埋めろは、ここさ埋めろ」なて、法蔵坊あ休んでいたところの丁度傍さ、
穴掘つて埋めたんだどはあ。そうすつど法蔵坊は氣持悪くなつて、傍にある松の
木の上さ登つて、かがんで見っだんだど。そしたれば、

「みんな埋めた埋めた、暗くなつから、あべはあべは」なて、がらがらて行つた
んだどはあ。そうすつど法蔵坊は、

「何だて、まず、オレあいたどこの下さ、茶毘埋めて行つた。なんだてほに、氣
持の悪いごんだ」なて、ぶつらぶつらて呟いていだったべも。この松の木から落

んべと思ったけど、何だて足あふるけて落らんねぐなったんだど。

そうこうしているうちに、何だか埋めて行つた棺のどこから青い火が、ポコポコ・ポコポコで燃える。幽霊火だったど。

そしたら、これはさぶしいさぶしい、背中から冷たい汗あたらだら流しながら、下るに下らんねんだし、木の上にすぐだまつていたど。

そしたれば、埋めて行つた穴の中から頭つだして、パー、青い面して、細っこい手出して、そろそろと出はつて来たんだど。

そして見つたれば、松の木さ、びたりびたりと上つて来るんだど。法蔵坊はおかなくて、おかなくてはあ、だんだん尻尾の方さ、尻こじやりに登つて行つたど。そうすつど、その幽霊あ、

「法蔵坊、法蔵坊、どこまで行つたてわかんねぞ、法蔵坊」なて追かけて来るんだど。

そうすつど、法蔵坊はおかなくて、おかなくて、真青になつて、ぶるぶるぶるえて、木の上さだんだん登つて行つたど。それでもその幽霊あまだ登つて来ると、

ピタリピタリと、

「法蔵坊、どこまで行つたて、わかんねぞ」

悲しいような音立てて登つて来るのだど。そして法蔵坊はおつかないもんだから、細いどこなのわかんねぐなつて、よくよく天井まで登つていったもんだから、スポンと木は落ちたんだど。そして法蔵坊も松川の中さ、スポンと逆さになつて落ちで行つたんだど。

そしたればそれあ狐に、行くときホラ貝で魂消らせて、狐はふつとんで行つたので、こんどは狐に返報がえしさつで、仇とらつたんだど。そうだから狐さいたずらさんねこんだつけど。トービント。

(菖蒲 安久津久造)

糠福と米福

糠福は先妻の子で、米福は後妻の子だった。二人で栗拾いに行つて来いて云
わつで、糠福は破つたハケゴあずけらつで、米福は、

「姉^{うしろ}さの後行けば、拾われっから」
て教えらつで行つた。

米福は糠福の後に行つて、ハケゴさいっぱいになつた。そこで米福は、
「オレはいっぱいになつたから、帰るは……」て云うたら、

「オレはいっぱいになんねがら帰らんね」て姉さが云うて、

「あ・ん・だ・先・に・帰・つ・て・け・ろ・は」て云うど、米福ば帰してよこした。

(貝生 工藤勝助)

「この話は後部が欠けてしまつて思い出せないということです。」

花咲じじい

むかし、じじとはばいたつけど。そして犬を飼つて、大切におがしして育ていたつけどな。

隣に欲のふかいばさまがいたつたど。そうしていっど、気持のええじんちや、ばんさはクイゴコをめんごくで、うまいもの食せて育そだでつたど。

あるときクイゴコが、

「畑さ、あえべ」て、じんちやを引っぱって行つたど。畑の隅さ行つて、

「ここ掘れ、ワンワン。ここ掘れ、ワンワン」て教えたど。ここ掘れてだな、て、このじんちや一生懸命掘つたど。それたれば、金がざくざく出て来たど。じんちやの前さ、ほらあ、大判小判がざくくらざくくらと出はつたべし、ばんさの前さ、ざくりざくりと金が出はつたど。その金を持たがつていって、よかつたどて大事にしていたところが、隣の欲ふかばさまが、

「そのクイゴコ、貸してやれ」

「貸されない」

「貸されないぞない、貸してやれ」て借りていって、犬あ行くても言ねな、縛つて無理に連で行ったんだど。そうすつど畑の隅掘つてみたど。出るものにや、セトカケだとかガラスカケだとか汚いもの、ざくもく出て来て今度あ怒つてはあ、クイゴコ殺してしまつたとは。いつか経つても寄越さねから、そのクイゴコ取りに行つたど。

そうしたどこあ、

「はつけなもの、なんにも出ねでガラスカケやセトカケなどばり、がらりがらり出て来た。えらしくないから、ぶつ殺して埋めて来た。そこさ松の木一本植えて来たから、行つてみんだ」て教えたど。そうすつど、根性のええじんちやとばんさ、そこを辿つて「むごさいこと」て行つたど。

ところが松の木が、たと大きく育つていたど。その松の木を切つてきて、スルス拵えで米ひきしたど。

松の木の 小ズルスは 上かんだ 上かんだ

コロリン コロリン

とひいたもんだ。そうすつど、じんちやとばんさの前さ、ざくりざくりと大判小判がまた出たど。そこさ欲たかりはまた来て、

「オレさ、ほいっ貸してやれ」

「お前さ貸さんね、貸すずど、悪るいごどすつから…」

そうすつど、

「何してこつちの家で、ほんがえ金貯った」て聞いたれば、

「お前にクイゴコ殺さつで、植えてけつじや松の木が育つてたから、このスルスおがを拵えて引いたら、こげな金も落ちたなだ」

「ああ、ほんじやこいつ貸せ」て、隣の欲たかりあまた借つて行つたど。そして引いてみつど、ないでもロクなもののしか出てこね。牛の糞や馬の糞などばり、びたりびたりとじんちやとばんさどこさ落つこんだど。すると怒つて、こげなものこつしやえでぶつ割つて焚いた方がええて、焚いて便所の陰の方さその灰をとつて抛げだんだ

ど。

そしてまた、寄越さねから、催促に行つたどこあ、そのばんさあ、

「こげなものの、だつでえぱりで、牛の糞や馬の糞などばり、びたかたと出つから、はづげなもののぶち割つて焚いてしまった」て云わつたど。

「なえでも、そういうことばかりされで困る。やっぱり貸さねどええかった」て云うて、取り返しはつかねんだし、

「その灰でもええから、灰けておくやい」て、その灰もらつて来たど。

灰もらつて来たどころあ、殿様がこの道をお通りだ。だからその灰を持つて行つて、木の上さあがつて、殿様の来るのを待つていだど。そうしたどこあ、殿様ござつたもんだから、来る先に灰を持つて木の上さあがつて、

アヤはチュウチュウ

コガネ ザラザラ

チチンポン パラリン

となえて、灰をパアツと振つたもんだど。その灰のかかったところあ、桜の

花が見事に咲いたど。そうすつど、殿様からごほうびに衣裳よ何よといっぱい授けらつで、ツヅミにもらつて、ばんさと喜んだど。そこんどこさまたその欲たかり来たど。

「あんだ何してこんがえ貰つて来た」て云うたどこあ、

「お前に貸したスルス割つて焚いたから、その灰を貰つてつて、花咲かせたどこあ、殿様からえらいごほうび貰い申したんだ」て云うたら、

「ほんじやらば、おらえのじんちやも…」て、まだやつたど。

欲たかりばあは、いま来つか、いま帰つかと待つていたど。

「来ねざない、来ねざない、おらえのじんちやも赤い衣裳もらつて来んべから…」て、ボロ衣裳など皆焼いて待つてたど。

「なんだて来ねもんだ」ていたどころあ、灰振つたじんちやの灰あ、殿様の口や目さ入つて、

「こんな者、ただかんにんして置かんね、いじめなければなんねえ」て、ひつぱだがつで、体が血だら真赤な身体なりになつてしまつたど。

家にいたばんさは今来つか、今来つかで出で見たどころさ、真つ赤な身体なりして来たから、

「いや、おらえのじさま、赤い衣裳で来た」ていたどころが、衣裳でなくて、血だら真赤な体だったど。んだから欲の深いことは決してするもんでないぞな。トービント。

(西高玉 佐藤まつ)

トチの実ポタン ― 長い話 ―

山さ行ったら、大きな栃の木あったど。栃の木の下さ昼眠したら、栃の実がポタンと落ちては、コロコロと転んで行つて、下の谷間さ行くど、ジャポンと入ったど。また栃の実が転んで…。このくらい長いむかしないもんだ。

(西高玉 佐藤まつ)

赤い小箱 白い小箱

むかし、おじんちやとおばんちやいだつたど。おばんちやが川さ洗濯に行った
ら、赤い小箱と白い小箱、流つて来たど。

赤い小箱 あっちゃいげ

白い小箱 こつちやこい

て云うて、白い小箱拾つて中ば開けてみたら、中きクイゴコ入つていたど。そ
れを育おがしたらクイゴコから、「山さ遊びにあえべ」て云わつて、

じんちやも乗れ クエンクエンクエン

ばんちやも乗れ クエンクエンクエン

俵もつけろ クエンクエンクエン

「そんなに付けらんね」て云うたら、

「ええからつけろ、クエンクエンクエン」て連しえでがれらつて野原まで行つたら、

「ここ掘れ、クエンクエンクエン」て云わつて、大判小判いっぱい出たど。

そしたら、隣の火もらいばんさ来たんだど。

「火^け呉でおぐやい」「寄つて持つてつておぐやい」て云ったので、入つて来て、「こんなにいっぱい、どうして出した」て、けなりがったど。そしてそれをおしえたどこ、

「クイゴコ貸しておぐやい」

「貸さんない」て云うのを、無理やり連れて行^{しえで}つたんだど。そして付けろとも云わねな、のれとも云われねな、引っぱだき引っぱだき行つたところが、掘れとも云わぬ所を掘つたれば、カワラカケやセトカケばかり出たど。怒つてクイゴコ殺してはあ、山さ埋めて松の木一本植えて来たどはあ。

「クイゴコ返してけろ」て、おじんちやが行つたれば、

「はつけなもの、殺して埋めたから松の木植えてあつから」て云われて行つたら、大きな松の木あつたど。

その松の木でスルス彫つたど。そしてところで（松の木の、おズルス、ようかんだ、ようかんだ）て挽いたところが、チャランチャランて大判小判落ちたど。

火・も・ら・い・ば・ん・さ・が・ま・た・来・て、ま・た・け・な・り・が・つ・て、

「ス・ル・ス・貸・し・て・お・く・や・い」

「貸さんね」て云うたな、持たつて行つて挽いたところが、また同じにカワラ・セトカケしか落ちながつたど。そしてまた怒つて、割つて焚いだどこだど。そこさ、
「返かへし・て・お・く・や・い」て行つたところが、

「は・つ・つ・け・な・も・の、ぶ・つ・割・つ・て・焚・い・た」て云うので、

「灰あだつてええから、持つて行くべ」て云うて貰つて来たど。その灰もつて、殿様来たどこさ、「花咲かせの名人、花咲かせの名人」て行つて、（アヤはチュウチュウ、コガネザラザラ、チチンポン。パリンン）なて、枯木さ灰蒔いたら花咲いたど。

殿様は大変賞めて、殿様に、

「重おもたい箆ええか、軽かろい箆ええか」て云わつて、

「年寄りだから、軽かろい箆ええ」て、軽かろい箆もらつて来たど。

「家まで行がね内、開けんよ」て云わつて、家さ帰つて来て開けてみたら、赤い装束や宝物いっぱい入つてたど。

火・も・ら・い・ば・ん・さ・が・ま・た・来・て、灰あくを持たつて行たつたら、殿様から「花咲かせてみる」
て云わつて蒔いたげんど、花は咲かねがったげんども、殿様は、

「重たい籠ええか、軽い籠ええか」て云うたど。

「欲・た・か・り・だ・か・ら、重たいな・け・て・お・く・や・い」て云うたど。

「開けないで行けよ」て云わつだげんど、あんまり重たいので、途中で開けてみ
たど。そしたら、蛇とか何かの化物がいっぱい出てきて、血だら真赤にさ・つ・た・ど。
おぼんちやは「あら、唄うたつて来たどら」て見つたら、泣き泣き帰つて来たど
こだつたど。

んだから決して欲・た・け・ん・な・よ。トービント。

(西高玉 原ひで)

雀むかし

じんちやどばんさが雀飼つてたど。雀が機織つて。パタパタて、
「その機を売りに行んから、ばんさ窓貼りしつたどさ行つて、糊などなめたりす
んなよな」

て、じんちやは機売りに行つたど。そしてじんちやが行ってしまったたら、雀はそつ
と糊なめたど。ばんさは怒つて、
「この畜生」どて、舌切つて飛ばしてやつたど。そしたらじんちや帰つて来て、

「雀、雀」て云うても返事あなかつたど。
「雀どこさ行つたべ」て、ばんさに聞いたたら、「畜生、糊なめあがつたから、舌切つ

て飛ばしてやつた」て云つたど。
じんちやは雀探しに、出はつて行つたど。

「雀あどこさ行つた」
そしたら笹やぶで、雀あ機織りしつたつたど。「雀でないか」て云うたら、

「じんちゃだら寄せる。ばんばだら寄せね」て、タンタンタンて、機織りしつたど。

「雀、雀、じんちゃだぜ」したらば、じんちゃ来たかて、ぶどう酒飲^{ざけ}ませて、雀いっぱい寄せて、大酒盛して、

「ツヅラ呉^けてやつから、重たいなええか、軽^{かる}こいなええか」て云うから、

「オレも年取ったから、軽い方がええ」て、軽い方のもらって来たら、いっぱい赤い衣裳入っていったど。トービント。

(西高玉 佐藤まつ)

お糸 唐糸

むかし、お糸と唐糸て云う姉妹あつたど。お糸は姉で唐糸は妹だったど。

糸とりしたので着物作ってやつどき、妹の方さ綺麗な着物きせて、姉の方さ太い糸の着物きせたど。そうすつど、人から「太カラ、太カラ」て馬鹿にされっかつ

たど。

ある日、殿様が祭のときに姉妹を見つけて、嫁にけろて云うたど。おっかさまは妹の方を殿様に嫁にくれっかど思っただけど、姉の方が大人しくて、器量もよかつたもんで、姉のお糸の方貰わっただど。

(西高玉)

食わず女房

むかし、村にある男が、
おまか

「御飯食ないオカタ欲しい」て、神さまさ願ったど。そしたらあるとき御飯食ないオカタ来たど。そしたどころあ、男が、

「あれあ不思議だ、御飯食ねで毎日いるぞあ不思議だな。何かあるもの」ど思っただど。

そしてあるときに、男は、

「オレあ旅に行つて来つから、お前留守居してろ」て云うて、そおつと天井さ登つて、節穴から見てつど、女房は夫がいらないから、喜んで夫が行つた後で、一生懸命で御飯、でつすら炊いて、ヤキメシ握つて、頭さヤキメシ食つたど。

いっばい食つたもんだから、腹くつつくなつてはあ、出掛けて行つたど。男あどこさ行くもんだと思つて、後追っかけて行つたところが、野原のビツキいっぱいいたどこさ行つて、

「いや、ええかつた腹くつつく食つて来た」て云つたど。

(西高玉 原ひで)

姥 捨

むかしあ、六十一才になつど、山さ捨てらんなねがつたど。

その家の息子あ、おばんちやを山さ背負つて行つたら、途々、木の枝をおばんちやが折つて捨てでつたど。そして息子さ、

「木の枝折って来たから、そいつを頼たよつて帰れよ」て教えたのを聞いて、息子は、捨てかねてまた背負つて家さもり、穴藏さしまつていたど。

そうしたところに、「灰で縄なう」ことを殿様が云い出して、誰か灰で縄なう人いねかて云つて、さがしたど。息子は家さ来て、考えておばんちやに聞いたところろが、

「板の上さ、縄をあげて焼いてそのまま持つて行げ」て云わつて、持つて行つたど。そいつを殿様に賞ほめらつて、

「誰に聞いた」て云われたところ、ばんちやに聞いたて云うて、賞めらつたど。トービント。

(西高玉)

まま子とひばり

むかし、三人の娘を置いて母親なくした、おどっつあがあつたど。そして継母もらつたど。おどっつあが東京さ出かけて行つていないとき、継母が、

「ざるで水汲め」て娘らさ云うたど。

「ざるで水汲まんねもの」て泣いっだれば、隣のばんちやが来て、桶貸してくれたので、それで汲んだど。そうすつど、

「石で火焚け」て云つたど。そうすつど、

「石で火焚かんねもの」て泣いっだれば、木一束持^{たが}つて来て、湯沸かさせたど。

そうしたれば、「へラで萩切れ」てだど。へラで萩切れて云わっただげんど、三人で泣き泣き行つたれば、じんちやと行き会つて、

「なして泣いっだ」オカチャにへラで萩切れて云わっただげんど、萩切らんねくて」て云うど、

「そんじや、鎌貸すから、持つて行げ」て云わつで、借^かつて三本切つてきたど。

そうしたれば、

「萩^{せい}ば風呂^{ふろ}さ渡^わせ」て云うので、渡すど、

「萩の上ば渡れ」て云わつて、火どんどん下から焚いているべし、一番娘渡つたど。そして落ちてしまつたど。そうすつど、二番娘も「渡れ」て云わつて、泣き泣き渡つて、三番娘も云わつたど。姉がみな死ぬもんだから、よくよく嫌^やんだくて泣いたら、

「渡れ渡れ」て云わつて、渡つたら落ちて死んでしまつたど。

三人の娘あ、みな死んだもんだから、継母はお倉の下さ、みな埋めてしまつたんだどはあ。

おどつつあ帰つて来たんだど。

「子供^こどさ行^いつた」て聞いたれば、

「遊び行つて来^こね」て云うから、おどつつあが川端さ足洗いに行つたら、ひばりあ飛んで来て、

ママカカ うらめしや

ザルで水を汲めという

石で火を焚けという

ヘラで萩を切れという

萩の橋 渡つどて ツルリン パチヨン

て鳴いだど。そしてお倉のどこさ、また行ったら、ひばり飛んで来て、また同じ唄うだつたど。おどつつあは夜になつても子供ら帰つて来ねので、お倉のどこ掘つてみたらば、三人みな埋めらつでだけど。ほだから継母じゃ、おつかねもんだど。トービント。

(東高玉)

テデッポッポ

むかし、おつかあど息子いだつたど。山て云えば川、川て云えば山ていう氣持の息子だつたど。何でも反對なもんだつたど。それがために、親がそのとき、「オレが死んだらば、川さだずど、水出つから、山さ埋めてけろな」て遺言しつたつたど。ところあ親が死んだもんだから川さ埋めて來たど。

そうすつど、雨あ降つて水あ出れば、おつかあが流れる。んだから雨降つど、テデッポッポ カカア流れる

て鳴くんだど。んだからそういういびつなことをするもんでないど。

(西高玉 佐藤まつ)

寢 太 郎（一）

むかし、長者の家の隣さ、貧乏な家あつたど。

「隣の家では朝早くから起きて働くから、なんぼでも旦那衆になる。おらえの・家・ん・な・は困ったもんだ、一年中寝てばりいて、寝坊してるもんだから、困った息子・なもんだ」て、大こぼししたど。そしたら、

「オレあ寝ていんなも、ただ寝てんなでねえ、勘定あつから寝てんなだ」

「寝てて勘定なて云うても分ったもんでない。稼ぐより他にないんだ」て親父に叱言いわつたど。

「んだて、勘定あつこで。考えていたんだ」「なんぼ考えつだて、稼ぐより他ないんだ」ていだそうだ。

「んじや、オレどさ鳩一匹買つて来てけろ」そして「おつか、提灯とローソク買つて来てけろ」て買わせて、隣の長者さまの杉の木の尻ぼえさ上つて、大抵ええころになったどて、提灯さ灯つけて、「長者、長者」て起したど。長者どこに丁度え

え・こ・ろ・な娘いだったど。

「長者、長者起きろ、八幡太郎が来たから起きて、お・が・み・申・せ」

そうすつど、長者魂消て、何なもんだどて出てみつど、杉の木の上き灯点あかしいて
いたど。

「八幡太郎はオレだど。隣の寝坊を、長者の娘の簀にしないど、今にも亡びてし
まうぞ」て、怒鳴ったど。旦那さまは、

「確かに、隣の簀もらう」て、神さまさお礼云つて、

「ほんじゃ、帰つてお・く・や・い」て云うたば、鳩の足さ提灯つけて、鳩飛ばしてやつ
たど。そしてとうどう長者の簀になつたけど。トービント。

(西高玉 佐藤まつ)

寝 太 郎 (二)

むかし、貧乏で餅搗かんねくっていた家の寝太郎が、何とかして餅食くたくて、隣の家でいっぱい餅搗いたから、何とかして餅を食ってけましようと思つて、考えた。

誰も見えてねうちに、窓から紅べにを吹いたど。吹かつた家では不思議に思つて神おろしに聞いたど。それたれば、「その餅は食つて悪いから、隣の家さ、みなやれ」て云わつて、寝太郎がもらつて食つたど。

(西高玉 原ひで)

蛇にみこまつた娘

むかし、蛇が男に化けて、女おなごどこさ毎晩通つて来たもんだつたど。毎晩来るもんだから、

「あの人^はな^えだ^て、す^げな^い人^だ」

て家の親達も氣あ付いたことあったど。

そうしていだどこあ、段々に娘が青くなつて、人色ひといろでなくなつてしまつたど。

娘あ悪くなつど困るどて、親達が心配したど。そうしてゐるうちに、

「あ^の男^に何^かか^にか^ある^に相^違な^い。何^とか^して見^はら^かし^たい^もん^だ」

て、親父が外に出て、娘さ豆炒りさせで、自分は娘^だのいるところ見えるように隠つていたど。

鍋でがらりがらりと豆炒つていたもんだが、蛇がその鍋のツルさ、ぎりぎりからまつて、ヘラを口にくわえて、豆炒りしたど。

「つまんねな、つまんねな」て思いながら親父は不思議にしているうちに、娘が段々にが^おつて、死^んでしまつたど。そうすつど、あの蛇の畜生だ、て、そこら搜すげんど、なかなか見つかんねがつたど。

んだから、決して外さ小便たれつどきにあ、穴のあつどさたれんなよ。トービント。

夢 と 餅

むかしあつたど。村に三人兄弟いだつたど。

一番上のアン・ニヤは一平、二番子は二太郎、三番目は三之助と付かつたのだつたど。何も芸はなくて、仕事すんのもやんだくていだつたど。

お正月の二日に荒砥の清水屋さ行つたところが、持かんねような大きな餅もらつたど。たつた一つばかりなもんだから、分けて食うようもないんだし、晩方頃だつたし、お深山しんさんに奴宿やつこやどがあつから、そこさ泊つたど。そして、

「今夜、初夢の日だから、一番といい夢みた人あ、この餅食うことと決めたらええがんべ」て三人で語り合つて決めたど。三人が早く眠ねつて、早くええ夢見て、餅食つてやんべどて、てんでに寝ねでしまつた。一番兄も二番兄もぐうぐう眠つて、三番目は、

「とにかく夢など見られつか、見らんねが分つたもんでねえから、とにかく餅あちやんと食つて、始末して、それから眠んべ」て思つて、みんな眠るばかり待つてだど。みんなぐうぐうてイビキかいでるうちに、ありだけ餅食つてしまつたど。いや、腹くつちい。ある刻限が来て一番兄は二番、三番子を起して、

「オレあ日本一ええ夢見た。富士山の嶺さ上つて、茄子もぎしたどこあ、鷹がとんで来て、オレの襟頸くわえて、オレどこみな鷹あ食つてしまつた夢で、一富士、二鷹、三茄子びて云うあ、オレあ日本一ええ夢見たぞ」て云うたど。

二番子の番になつて、

「オレあ夢はそれよりええ、今日一番ええ夢みた人は餅食うことて云うから、オレだな。荒砥の清水屋さ行つたところが、こげな大きな餅をもらつて、餅食え餅食えて云わつて、いいや、腹くつちいにも、うんと我慢して、目覚めるまで腹くつちいがつた。オレの夢は兄のよりええ夢だ」て云うたど。

三番子の番になつて、

「いや、オレは一時、目覚ました。それはどういふわけかて云うど、兄貴は富士

山の嶺さ上って、鷹にさらわつて、食わつてしまつて死んでしまつたし、二番兄は清水屋から大餅もらつて腹ぼうず食っているもんだから、早く起きて、お前、たった一つ貰つた餅食つた方がええて云う神様の夢で、起きて食つてしまつたところだ」て云うたど。

賢いのはかなわねていう話だつたど。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

どんずやりにあ切りがない

むかし、どんずやりいだつたど。

あんまり稼がねほで、家のオツカからヤキメシ一つ握つてもらつて、そいつを背負わせらつて、ぼだしてやらつたど。

そして行つたげんど、頸からヤキメシとつて食うのが大変だつたもんだから、腹あ減つても取つて食うやんだくて、かまわず歩いて行つたど。そしたらば、笠

かぶつた男は口あいて来たつたど。

「あのやつは、腹減つて来たんだから、もしオレのヤキメシ、オレの頸からとつてもらつて、半分くれてやれば、半分は自分が食えつから……」て、あの野郎だまして頸からヤキメシとつてもらうべと思つたど。そして、

「オレの頸にヤキメシあつから、取つたら半分、お前さやつから」て云うたら、
「いや、はいつづげな、人のことなどしてらんね、オレあ笠の紐ゆるんで、仕様ないげんども結ぶのやんだくて、口あいてこうして来たんだ」て云うたど。
どんずやりにあ切りがないもんだど。トービント。

(貝生 工藤六兵衛)

狐 千 匹

八百の嘘を上手に並べても

まこと一つにかなわざりけり

一休和尚

「今日、オレあ晩方、用がひけつとき、山まで来たら、狐千匹ばかりいて、いや、さぶしくて仕様しよなかった」て云うたど。そしたらそれを聞いた友達あ、

「なにつかして、千匹の狐なて、とんでもない話だ。狐千匹なて、どこにもいるもんでない」

「いや、百匹はいだったな」

「百匹の狐なているもんでない」

「いや十匹はいだったな」

「十匹なて、狐十匹なて、いるもんでない」なて云うたら、

「とにかく、一匹はいだったべ」

「いや、あその山さ狐いるなて聞いたことない。お前は何か見違えて来たのんねが」

「とにかく、ガサエッーてだけは云うたぜ」

「にさ、さぶしがりだから、そう感じだなで、狐などいるもんでねえ」て云うど、とうとうそいつは嘘になっちゃったど。

だから、とんでもないことは云うもんでないど。

(貝生 工藤六兵衛)

大 当 た り

むかし、あるところに狩人がいだったど。一つ玉つめて、打越沼さ行ったどころが、鴨はずうつと二十羽も横に並んで、沼の上さ浮ぎ^うったけど。一つ玉なもんだから、スポンと打^ぶったところが、二十羽の鴨あ、ありったげ打ち通したど。

ところが、逸れ玉は沼岸にあつた大きな栗の木の下さいた熊は昼眠^{ひるね}していたが、その熊の腹さ当^あったど。そしたらば熊は苦しまぎれに、栗の木をたずさ^{たずさ}えでゆさゆさゆす^{ゆす}ったど。その栗の木の実は、今熟^うんで落ちるばかりだったほでに、栗はボダボダ落ち^{おち}たど。

沼のあちこちさ浮いた鴨二十四匹背負^せつて、熊一匹とつて、大栗三俵^{さんば}ばかりほろ^ろつてくれたのを拾^{ひろ}つて、それから見たれば、熊が切^せないまぎれに後足でガリガ

リ根っこ齧ったもんだからそこに生えた自然薯二十貫目ばかり掘ったど。

そして気付いで、衣裳が重たいと思って、脱いでみたところが、股引の中さ、どんじよが五六貫目入っていたど。帰りには背負って来らんねがったほどだったど。

これぐらい大当りもないもんだ。

(貝生 工藤六兵衛)

神ない話

ヤロコべらあ道の傍さ小便たれだり、川さしったところが、そこさ村の和尚さまが通りかがって、

「道や川さ、小便たれんな、川の下の方さ使い水しているなだから、決して小便などたれでわるい」て云うたど。ヤロコべらは、

「ほんじゃ、どこさたれっこど」て、和尚さまき聞いたところが、和尚さまは、

「川には川の神さま、山には山の神さま、道には道の神さま、田には田の神さま
ざああつから、神さまのいないどこさたれろ」て和尚さまが教えるもんだから、
ヤロコべらは、わらわらと木の上さ登って行つて、和尚さまの頭さ、チイチイと
小便たつたど。

そしたれば和尚さまは、ごしやえで、

「こら、オレの頭さ小便ひっかけるな、誰だ」て云うたどころが、

「和尚さま、和尚さまはカミのないうところさたれろて云うから、和尚さまの頭に
は、さつぱり髪がないから、たつだんだ」て云うたど。

（貝生 工藤六兵衛）

こころあたりは屁くさい

むかし、村芝居があつたど。

なんばこ氣いきかない、ズガばかりある馬鹿みたいな男が、役者にはまつた

ど。ほんで何したらええがわかんねもんだから、大江山の酒吞童子になれって云わっただど。

「こいつあ、鬼には、馬鹿面^{ばかづら}してるし、ズガ^{ずが}もあつからええべ。語りようも何もさっぱりわかんねもんだし」

鉄の棒のすばらしく太つといのを持って、紙に書いた「こころあたりは人くさい」ていうのを、読むだけだったど。

舞台さ出で、その字を読むと思つたら「人」という字の上の方を手でおさえて読んだもんだから、

「こころあたりはへくさい」て言うたど。んだから、わかんねもんは何させでもわかんねもんだど。

(貝生 工藤六兵衛)

トクサのワラジ

荒砥の郵便局さ、郵便もちが良かった。郵便もちちゅうのは、毎日歩かなね。そいつあ秋の日の道が悪い。藁で作ったワラジだど、一日に、七足も十足も履かなねがったど。いろいろ考えで、トクサのワラジ作つたれば切れまいと思つて、郵便持ちはトクサのワラジ作つたど。

トクサのワラジ履いて、打越の入口まで行つて、たばこすつど思つたら、足の平があんまり軽いもんで、ちよつとたばこして足の平ば見たら、足首まで減つてしまつていたつけど。

それからまた履いて、鳥居のところまで行つたところが、丁度乳のあたりまで減つてしまつていたつけど。

して、いよいよ打越さ行つて弥吉ていう、打越一番の金持の家さ行つて、「ゆうびん、ゆうびん」て郵便持ちはどなつたど。弥吉の家の人が戸を開けてみたげんども、どこにも郵便持ちいなかったど。よつく見たら、頸さワラジあつた

ど。

たばこ一服つけて、郵便持ちは帰つど思つて、

「頸^あばりではめんどくさいから、歩いてあるくには、そのカバンさ首^あを入つて行くべはあ」

て云うて、カバンに首をぱつと入つて、かついで来たつたど。

(貝生 工藤六兵衛)

シビとゴザ

銭も持たずに、晦市^{つめいち}見たくて行つた帰り、丁度となりの親父あ一背負いしよつて、買物して来たどだったど。

「何買つて来た」て聞いたところが、

「錦ゴザとシビ(塩まぐろ)買つて来たどこだ」て云うたど。

「なえだ、そなた賢いのに、死人^{しびとごぞ}莫^あ産^あ買つて来たなて」

死人莫座なて云わつたので、縁起が悪いて、どさりぶんなげてしまったど。
したらば、錢持たなくて行つた男は賢いもんだから、
「いやいや、これはこれは、シヨビヨクゴザる福の神」て云うて、ぐい^ら背負つて来たど。

(貝生 工藤六兵衛)

烏帽子沼

蛇は片貝の身を食うのが上手で、貝が開いていつどぎに、ねらつて身を食うがったど。

ところが、蛇が身をねらつて頸を突込んだとたんに、パチンと蓋^{ふた}してしまつたど。片貝から頭はさまつた蛇は、苦しまぎれに片貝つけたまんま、白鷹山越えで、向うさ行つたど。

その蛇見た虚空藏山参詣の人が、「ああ、烏帽子つけた蛇が沼^{ぬま}さいた」て云うてその沼を「烏帽子沼」と云うようになったど。

伝 説

鎌倉権五郎の投げ石

源義家の家来、鎌倉の権五郎が頭度山とうどのやまから左手で大石をなげたので、今も松川の石には権五郎の手の跡がのこっている。あまり行かなかったので、こんどは右手でなげたら、白鷹山を越えて、礪石まで行ったという。

黒滝神社縁起

元禄の頃西村久左衛門が黒滝の開鑿をやったとき、佐野原の剣崎不動の剣が落ちて、川に住む大蛇の体にささり、蛇の胴が三つに切れてしまったという。

(安久津久造)

民

謠

菖蒲しょうがいな

しょうがいな おどりはいま はじまるぞ

じさま出てみろ 孫つれて

しょうがいな

最上川舟唄

酒田さ行く^いから まめでろな

ヤレヤンサノセ

酒田の土産に まげあぶら

白鷹の民話 ― その文化圏について ―

武田 正

江戸時代からのことであろうが、白鷹に「越後瞽女^{こぜ}」と云われる遊芸人が、農閑期にやって来て、部落に、宿をとり、幾晩かを唄ったり語ったりするものだったという。このこぜは盲目で、二人で三味線をもって、やってくるものだったが、こぜにするために越後では子供のときに目をつぶしたものだという話を聞いた。また萩野の川部嘉蔵さんの唄う〈シンボエ〉という民謡は明らかに越後から秋田・青森にひろがりをもつものであって、越後の魚沼郡新保村の広大寺が発祥地だと云い、萩野の弘大寺の名からして、両者の関係を想像させる。また越後から入ったと考えられる古代越王族の祖を祀ったという古志王神社が、白鷹町に十王、高岡、深山とあり、長野・新潟など雪深い地方の民話たる「火種をもらった嫁」の存することから考えて、越後との交流が理解できる。伝説の面でも、八幡太郎義家の伝説は長井市の「卯の花姫」をはじめ、町内滝野地区の「そつと森」などに

定着しているが、義経伝説は米沢・赤湯にあるが、この地方にないことを見れば、米沢と赤湯を結ぶ文化の流れとは別種の文化圏であつたと想像される。

次に舟運による最上（山形）地方との文化の交流である。川にちなむ民話「鮭のよむかし」及び江戸初期のキリシタン宗の伝来、枳窪と朝日町今平との交易、江戸末期から明治大正にかけての筏流しによる長崎との通商はそのことを裏書きする。貝生の工藤兵次さん宅に保存されている「古実今物語」はママ子話の説話で、ストーリーとしても通俗であり、文学的価値は疑問であるが、その題材が朝日町太郎部落の物語であるという点、また行者が伝えたものであるという点で、民話の流入もまた考えられる。町内の各所にある「湯殿山講」の石碑、出羽三山詣りは近時まで行われたという点でも、行者が伝承者でなかったかと疑うことは不可能でない。

生活圏のせまい女子によつて語られる民話であればあるほど、この伝承者が神の使いである、行者によつて伝えられたときの信頼感は一そう深まり、語りつがれるということになるのではなからうか。また朝日行者から聞いた「法印と狐」

を語ってくれた朝日町出の私の母も、朝日行者が毎年冬になると山から降りてくるのがたのしみだったと云っているが、傍証として意味をもつものである。元禄年間に開かれた最上川通船がもたらしたのも、その意味で白鷹町の文化にとつて大きかったと考えられる。

更には、白鷹山と狐越街道の発達に伴つて、村山地方の民話が入つて来たと考えられる。一説によれば蒲生氏郷が畑谷を攻めた頃に、山形への街道が通じたと云われ、「水の種」「烏帽子沼」の伝説が入つて来たのであるが、民話の中で山形との交流はあまり深くなかったのではないか、むしろ文化的には白鷹の方が先進地であるか、文化の質のちがいのかもしれないと考えられる。

もう一つには、貝生の工藤兵次さんのところで、伊勢参宮の土産として、木版刷りの「俵藤太」の百足退治の絵付昔話が保管されているのを見た。地方から来た参詣者相手のものであったろうが、このような昔話は町内に聞かれなかったのを見ると、このような形で民話の移入はあまり大きいものではなかったのではないか。

ともかく以上のことから、民話の移入についての年代は規定できないとしても、越後地方からの文化を中心に山形・最上地方のものが混入したと見られると云うことは可能であり、行者とごぜの役割は大きかったといえるのではなからうか。

あとがき

昔話の話をさがして、民話の原型を求めるなどは、すでに遅すぎるのかもしれない。かつて自分が子供の頃にきいた話を、今、子や孫に語る機会もほとんどないという。

「十年前まではよく語ったもんだが」

とか、

「テレビが出てからは誰も聞く子はない」

とか、更には、

「おじいさんが生きてればなあ」

といった話をきくたびに、もう遅すぎるのだろうかという、自虐に似た気持ちにならざるを得ない。

代表的な、誰でもが子供のときにきいた筈の昔話が筋だけになってしまったり、途中で消滅したりしているし、一口話のようなものしか思い出してくれな

い話者を前にしていると、「むかし」は昔のものにすぎないという証拠を見せられているようで、つらい。

民俗調査の一環として民話を考え、民話の果して来た機能を考えようとして、民話を集めながら、社会変動の激しさのみを思い知らされる結果になってしまったようだ。

私個人としては、むしろ現実の生活の中で、子を、そして子と共に「民話を通して」自己を解放しようという人々の欲求にさぐりを入れたいという、大それた願いもなかったとは云えない。たとえば、「糠福と米福」で、先妻の子の糠福がいじめられることに同情するだけでなく、奇妙に明るい性格の糠福に感動すること、こんな民話の意義を発見しなかったように思う。

民話が話者即ち「語り口」と一つであるということは当然であり、だから民話が教訓と結びついたときの民話の感動の脱落は、民話が聞き手との協同で完成するというときの証拠となるであろう。「むかしあったな」に始まる民話は、常に子供の「合いの手」によって進行する。その「合いの手」のない民話は話者と聞

き手を分裂させてしまおうし、話者の意見の押しつけが始まる。白鷹の民話にある笑話「大当り」「神ない話」「トクサのワラジ」「シビとゴザ」などに見られるものは「合いの手」の不必要なものであり、話者が一つの世界を作ってしまったている。笑話がしばしば教訓の裏返しであり、大人の民話ではない、すぐ古びてしまう危険を持つのは明白であろう。

いい作品に出会ったときに、その作品がいい作品であるということを、感動をもって理解することこそ、大切なことである。

しばしば母によって受けつがれて来た民話である「瓜姫子と天邪鬼」「猿むこ」「だんごむかし」などにはそのような要求をみたしてくれるものがある。笑話や教訓話が、炉辺の「ヨコ座・カカ座・キヤク座」などの、家族や客の上下関係の中で語られるに較べ、母の背や寢床で母の乳首をにぎりながら、母の体温を直に感じながら聞くこと、老婆の子供にかえたような語り口から来る親近感が、教訓をこえた愛情のつながりの中の民話が、子供の、そして親の心を解放してくれるのではないだろうか。そう考えると、この仕事に一つの使命を感じるとい

ことは、あまりにおこがましいことであろうか。

昭和四一年二月

附 記

民俗調査の一つとして、白鷹町在住の奥村幸雄氏の案内で民話の採訪をやったテープを話者の語り口を生かして記録したものであるが、編集・印刷の責任は武田にあります。

蛇むこむかし 白鷹の民話

一九六六年二月 発行

編集・発行 奥村 幸雄

武

田正
(山形県立荒砥高等学校教諭)
(山形県立米沢東高等学校教諭)

山形短期大学民話研究センター資料叢書

しらたかの民話

蛇むこむかし

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年四月一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高島町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』

（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』

(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)

『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)

『お婆の手箱(一) 阿部キヌオさんの語り』

(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』

(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』

(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』

(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)

『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』

(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)

『飯豊町昔話―大平・新沼・高畑―』

(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)

『蛇むこむかし しらたかの民話』

(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)